

（なんか、緊張してきた……）

佐々木唯愛は落ち着くことのない心音を抑えるように、胸元へそつと手を当てた。

緊張の面持ちでやって来たのは、恋人・石上^{いしがみしょうご}将吾の自宅がある高層マンション。まずはオートロックのエントランスを抜けて、エレベーターへ乗り込んだ。ちなみに、乗るのはまだ片手で数えられる程度だったりする。壁についた鏡で髪型を確認しながら、彼女は深く息を吐き出した。急ぎすぎたせいか、前髪が少し乱れている。

今日は仕事が予定より早く終わったため、考えるより先にこのマンションへ足を向けた。家主の将吾にはこのことを伝えていない、いわゆるサプライズ訪問だ。理由は一つ、もうすぐ交際三ヶ月を迎える恋人を驚かせるために他ならない。

出会いは、約一年前。平日の朝、混雑する通勤電車の中だった。

「……………」

人の多さに眩暈がする。満員電車にはいつまで経っても慣れない、田舎育ちのせいだろう。なんとか近くの吊革に掴まって、降車予定の駅まで耐え忍ぼうとしていた。

（あ……………）

胸辺りへ不自然に押し付けられる何かに、反射的に視線が動いた。隣に

いたのはいかにもな中年サラリーマンだ。清潔感の感じられない、少々挙動不審なおじさん。

男は電車の揺れに乗じて肘を動かし、横乳へ擦り付けるようにしていた。あくまで偶然を装いたいのかもしれないが、いやらしい視線は谷間付近にねっとり向けられている。

（本当、しょうもない人もいるなあ）

満員電車には慣れそうもないが、悲しいことに痴漢には慣れきっていた。唯愛は幼い時分から、度々そういった被害に遭っている。

理由はおそらく、体型だろうという自覚はあった。けれども、そんな自分には好ましいと思っている。体型以外の理由としては、ボディラインが出るような服を好んで着ていることだろう。今日も例に漏れずそうで、暑いこともあって若干露出は多めだ。

全て好きでしていることなのが、勘違いをして近寄ってくる不審者は後を絶たない。

（ああ、早く降りないかな）

肘でわざと胸を触ってくる痴漢の降車が先か、自分が先か。

どちらかは分からないけれど、特に抵抗せず時が過ぎ去るのを辛抱して待つ。

腕を掴んで駅員に突きつければ話は早いのだが、あいにく満員電車の朝からそんな元気は残されていない。横の男はそれを分かってやっているのだろうから、本当に疎ましい。

「次は、○○。○○に到着、お出口は右側です」

機械的な車内アナウンスが聞こえてくる。あと四駅、そこまで耐えれば終わる。

小さく息を吐いて、意識を逸らすため吊り下げ広告に視線をやった。

アナウンスから少し間を置いて、電車がゆっくりと停止する。その揺れすらも利用したいのか、また肘が胸へ雑に押し付けられた。何が楽しいのか分からない行為に、いよいよ辟易してくる。

ドアが開けば、どっと人波が流れ出ていく。しかし隣の男が動く気配はない、どうやら耐久戦は続くようだ。

「あの。少しいいですか」

「……えっ」

うんざりとしてため息が出かかったところで、突然頭上から凄みのある声がかかる。そこにいたのは、頭ひとつ分以上は背丈が違う強面な男性だった。

男性の圧を感じる声に固まっていると、隣の痴漢も即座に表情を変えた。

顔をさあつと青ざめさせて明らかに動揺している。

唯愛と強面な男性を交互に見やった後、焦ったように人混みを掻き分けて降車した。

「ドアが閉まります、ご注意ください」

アナウンスの後、ドアが静かに閉まっていく。ドアガラスの先に、もうその痴漢の姿はなかった。

（助けて、くれた……？）

大柄で少し目つきの悪い男性を見上げる。彼は窓の外に睨みを利かせた後、視線を唯愛へ戻した。

少し機嫌が悪そうな表情に見えるが、攻撃的な圧は感じられない。その矛先は、電車の外へ向いているように見える。

「……申し訳ない。取り逃がしてしまいました」

「え、えっ。なんの話、ですか」

「先ほどの男、痴漢でしたよね」

ああ。やっぱり、助けてくれたんだ。

胸の内で炎がぼわっと灯ったような、じんわりとした温もりを感じる。

唯愛にとって、それは初めての経験だった。

派手な見た目と露出の多い服装、所謂「痴漢」にあっても文句は言えない女“のテンプレート。そんな彼女は、助けられることも、助けを求めることもなかった。

仕方ないと割り切って、勘違いだろうと自分を騙してこれからも生きていくしかない。

そう、思っていたのに。

「声をかける前に、まずあの男を取り押さえるべきでした」

「っ、は、はあ……」

「証拠は撮っていますので、もし良ければ次で降りて」

（私みたいな女を助けてくれる男の人、本当にいるんだ……）

窮地から救い出してくれるヒーローや王子様のような存在など、フィクション限定だとばかり思っていた。

「……大丈夫ですか？」

「うえ、何が」

「涙。……痴漢、怖かったですよね」

そつと、ハンカチを渡される。そこで、自分が泣いていることに気がついた。今まで何をされても、泣くようなことはなかったのに。

揺れる電車の中、周りにもたくさん人がいるのに、泣いてしまっている。情けなさと、そんな自分にも寄り添ってくれる名前も知らない彼の優しさ

が胸に沁みた。

一度栓が外れてしまうと、止まらなくなる。次の駅に止まるまで、面識もない男性の分厚い胸板に支えられて、静かに涙を流した。

「すみません。……恥ずかしいところをお見せして」

予定よりも前の駅で降り、念のため改札の駅員に証拠を見せて話をした。男性が撮ってくれていた写真は、痴漢が唯愛の胸を凝視しながら肘を押しかける場面がはっきりと写されていた。本人を捕らえることは叶わなかったが、もしかすれば誰かのためになるかもしれない。

「いえ、構いません。それより、俺の不手際もあったので」

「い、いや！ 助けていただいただけで、すごいありがたかったです」

男性が深々と頭を下げるのを慌てて手で制して、唯愛もお辞儀を返した。大柄な人が腰を折り曲げて頭を下げる光景というのは、威圧感が凄まじい。

若干サイズが合っていないのでは、と思うほど鍛え上げられた筋肉を感じるスーツ。ぱっと見ただけで、手や足も同じ人間とは思えないほど大きい。

加えて切長の瞳にがっしりとした輪郭、総合して見ると堅気に思えない迫力があつた。

「……ひとつ、お聞きしても？」

「は、はい。何でしょう」

「どうして、諦めたような顔をしていたんですか」

その問いかけに、ぎくりと肩が揺れる。初対面の男性にそこまで見抜かれてしまうほど表情に出ていたのか、と内省しながら笑って誤魔化す。

「まあ、こんな容姿ですし？ よくあることですから」

以前痴漢の相談した時、知人に何気なく言われたことがあつた。その格

好からやめてみればいいのではないか、と。その時は、なぜ被害者が加害者に気を遣わねばならないのだと反論できなかった。

胸を強調するような、肌を見せるような格好をしているから痴漢に遭うし盗撮されるのだ、と真正面から言われた気がした。

そこからは下手に抵抗せず、素知らぬ振りで耐える方が楽だと考えを変えた。嫌がる姿を喜ぶ人間も一定数いるそうなので、そういった輩には効果はあった。

逆に反抗しないことを理由に、合意だと勘違いしてエスカレートする痴漢もいた。それを、総じて面倒に思っていた。

くだらない人間に消費され続ける、そこに心を碎き過ぎても、いずれ潰れるのは自分だと半ば悟っていた。

「でも、助けてくれて嬉しかったです。私もお兄さんみたいな容姿だった

ら、こんなことされないのかなあ。なんて」

冗談めいて笑う。嫌だ無理だと、感情的になって泣き喚けるような歳でもなくなったのだから当然の思考だろう。

しかし、もし体格の良い男性であつたなら違った人生もあつたのかもな
んて思う。今の自分が何よりも好きだし、あり得ない話ではある
けれど。

「その容姿であることと痴漢に遭うことは、関係ありますか」

「へっ」

「俺はないように思えます。被害者に加害の原因を押し付けるのはおか
しい」

険しい表情をしながらも、そこには確かな思いやりが見えた。先程の行
動といい、今の言葉といい、彼は出会った中で一番正義感の強い人だと実

感した。

他者を容姿で判断してはいけないと、改めて思わされる。そして、自分も容姿による偏見に多少悩まされている側の人間として、彼は悩みが多そうだなとも感じた。

とても実直そうだが、強面なことで勘違いの多い人生だったに違いない。

「優しいですね、お兄さん」

「……。別に、俺は当たり前のことをしたまでです」

「当たり前を出来るのも、素敵なことですよ」

チラリと腕時計を確認すると、このままでは遅刻しそうな時間だった。

「うわ、やばっ」

「……俺もまずい時間だ」

「ですよ、ごめんなさい巻き込んで」

まずは上司に連絡だ。メッセージアプリを起動したところではっとする。このチャンスを逃したくない。逃せば、一生後悔してしまいそうな気さえた。そう思えば、言葉はすつと出てくる。

「お兄さん！ 良かったら、連絡先交換しませんか」
吊り橋効果だなんだと言われたって関係ない。そう思えるほど、久しぶりになる恋心の芽生えだった。

（今思い出してもかつこよかったなあ、将吾さん）

痴漢されていたところを助けられてから始まった関係。積極的に好意を見せる唯愛と、一線を引き続けていた将吾の攻防は約三ヶ月前に唯愛の勝利で幕を下ろした。

「佐々木さんが、後悔しないのであれば」

交際を迫った唯愛の告白に対して、なんとも後ろ向きな答えをして頷いた将吾の姿も記憶に新しい。

そこから現在は、合鍵を貰い自由に将吾の自宅へ訪問できるまでに距離は縮まった。仕事の関係もあつて最近は忙しくしていたため、合鍵を使つての訪問は今回が初めてになる。

（いなかったらどうしよう……）

やって来たはいいものの、不安の種は多かった。サプライズで自宅に行くだけでも緊張しているのに、不在だったら、迷惑がられたら、誰か先客

がいたら。一度考え出したら止まらない。

なぜなら、将吾に手を出されたことは今まで一度もなく、初夜もまだだった。彼の好意は分かっているが、何があってもおかしくない。

「はあ……」

気にしないよう努めていた事実を思い出し、ため息が漏れた。スキんシップも手を繋いだりハグをする程度で、それ以上はまだない。

触れるのも唯愛からで、将吾は想像以上に奥手なタイプだった。年齢差と体格差で将吾が遠慮していることを頭では理解しているものの、そろそろ我慢の限界でもあった。

（私は、好きな人とたくさんイチャイチャしたいんだけどなあ）

触れ合いは、互いに心を許しているからこそ出来る最上級の愛情表現だ
と思っっている。

だからこそ、将吾との関係をより深めたい唯愛はもどかしさを感じていた。

（将吾さんも、嫌なら嫌って言うてくれたらいいのに）

スキンシップをとっても、拒否する素振りは全く見せない。しかし彼の表情は基本変わらないため、真意は定かでなかった。

口数も決して多い方ではないことも重なって、将吾がスキンシップをどう思っているかさっぱり分からない。

——八階です、ドアが開きます。

無情にも、エレベーターが到着を告げる。考え事をしていた唯愛は、そのまま閉まりそうになったドアをボタンで阻止し、急いでエレベーターから出た。

蛍光灯の眩しい静かな内廊下が、より緊張感を高める。慎重にゆったり

と足を進めるが、部屋の前にすぐ着いてしまった。

一呼吸置いた後、貰った合鍵でドアを開錠する。

「……っ、いる」

静かに開けたドアの先、見慣れた大きな革靴が綺麗に揃えて置かれていた。それ以外に靴はなく、来客の気配もない。全体的に、人の気配が薄いせいかもしれない。

恋人宅へのアポなし訪問というより、空き巣に入る盗人のような心持ちになってしまう。そっとパンプスを脱いで、極力物音を立てず部屋に上がる。

靴があるのに、どの部屋も照明がついていないのが少し気がかりだ。まずは、微かに扉が開いている手前の寝室を覗いてみる。

（えっ……）

唯愛は暗がりの中、衝撃的な光景を目の当たりにした。ポカンと開いた口からは、驚きのあまり声が出ない。

予想だにしていなかったことに、体が硬直して動かなくなる。しかし視線は釘付けになっていて、そこから目を逸らせない。

「っ、んあ……あ」

それは初めて目にする、恋人・将吾の裸体だった。

普段スーツで覆われている彼の体は、思った以上に逞しく分厚い。大きな肩幅、骨太な腕、丸太のような太腿、何もかもがベッド上でこれでもかと晒されている。

そして張本人の将吾は、盛り上がった胸筋、その頂にある二つの尖りをしつこくつねっては捏ね回していた。

「あう、はっ……。乳首、ちくびこねこね好き……」

威圧感の原因でもあるだろう、鋭い切長の瞳をぎゅっと閉じて感じ入っている。耳にはイヤホンがついており、唯愛の訪問に全く気づいていない理由が分かった。

「ふう、ああ……、んぐっ」

唇はふるふると震えながら、時折色っぽい声を漏らしている。普段の誠実さと余裕を感じさせる、落ち着いたそれではない。低さはそのままに、どこか甘さのある掠れ声。

湿り気のある息とともに、内なる興奮を外へ吐き出している。そして時折腰を浮かせては、びくんと体を揺らしていた。

他人の行為を見た経験は一度もないが、将吾が今まさにオナニーを楽しんでいるのだと直感的に理解する。

（えっ。おちんちん、すご……）

開かれた股間に鎮座する将吾の陰茎は、想像を絶する大きさだった。巨根と呼ばれる類だろう。それが、将吾が乳首を捏ねる動きに共鳴して脈打っている。

どうやら将吾は乳首で快感を得ているらしく、陰茎を凶悪的なサイズに勃起させていた。

受け入れ難い現実が視界いっぱいに広がっているが、唯愛の下腹部はなぜか熱を持って疼いていた。

（やばっ、私おかしいのかな）

一般的に考えて、アポなし訪問した先の恋人が自慰行為をしている。それも、一人で乳首を弄っていたならば、落胆か失望してしまうものではないだろうか。

仮に過去の恋人がそうだったなら、唯愛は即刻部屋から逃げ出しお別れ

のメッセージを送りつける。そして、即刻ブロックしていたことだろう。

しかし、今この瞬間唯愛に宿る熱は違っていた。

（かわいいっ、かわいいなあ……将吾さん）

ベッドの上で壁にもたれ、しつこく自身の乳首を責めながら喘ぐ将吾の姿を見て、これ以上ないほど高揚感を覚えていた。まだ見ていたい、この先も全て記憶に残したい。

間抜けに開いてしまっていた口を手で覆い隠して、ほんの僅かな隙間から将吾のオナニーを覗き見る。感じたことのない欲求に駆られながら、必死に息を潜めて気配を消した。

「あっ、……はう、……おふっ♡」

将吾の声色が変わり始めた。外から見ても、部屋の室温が上昇したのを感じる。

呼吸は浅くなり、胸は大きく上下していた。将吾の乳首を弄る手つきもどんどん強さを増す。親指と中指で勃起乳首を引つ張りながら、赤い乳頭を人差し指の腹で器用に摩っている。

その下で、微塵も触れてもない陰茎は我慢汁をこぼして淫らに震えていた。小さな乳首を巧みに責めながら陰茎を勃起させる、刺激的な光景にぐらりと視界が歪む。

けれどもじつとその顛末を見守るべく、目線を逸らさず意識を向けていた。

「んあつ、んんっ……。おおおッ♡」

将吾は胸の底から響くような低い呻き声をあげた。同時に乳首をぎゅつと引つ張りながら、背を丸める。脈打つ陰茎からは、涙のように我慢汁が流れ落ちていく。

絶頂が近いのだということが容易に想像できた。昂っている将吾の感覚が伝染しているみたいに、唯愛の全身も熱く火照り始める。

なぜだろうか、胸騒ぎが止まらない。腹の奥から迫り上がってくる未知の感覚が、唯愛の心拍数を上げていく。

自慰行為を覗き見ておおよそ抱く感情でないことは頭で分かっている。しかし、本能的な気持ちの高ぶりは制御しきれない。

「んあっ、んおおおっ!! んお、ほお……♡」

将吾も勢いを止めることはなく、ひたすらにくにくにと乳首をいじめている。快楽に歪む顔は紅潮し、全身から汗が噴き出していた。

もうすぐそこまで来ているのだろう、と感覚で分かる。声も我慢出来なくなっているのか、際限なく大きくなっている。野太さの中にある、快感を喜ぶ響きが鼓膜を揺らした。

「おお……♡おほっ♡い、いくッ！　いぐッ、いぐいぐうッ……!!」
息を荒くしている将吾は、すりすりと乳首を擦り上げてから、ぎゅうつとつまんだ。腰が大きく跳ね上がり、背中が弓なりに反り上がる。

虚空へ向かって叫んだ通り、将吾の立派な男根からはどぴゅうッ♡と白濁液が飛び出した。

その剛直を直接扱くでもなく、ちょこんと勃ち上がった乳首二つだけをいじめて将吾は見事に射精した。

（本当に、……乳首だけで）

驚きと高揚感とで胸がいっぱいになる。正直な話、まだ見ぬ将吾の陰茎を受け入れる夜を考えたことは、一度や二度ではなかった。今日は、本来はそのつもりでいた。

なし崩しの事に及んで愛し合っていると、ぼんやり段取りを思い描いて乗

り込んできた。

しかし、予想とはあまりにかけ離れた現実には、彼女の中には不思議な感情が芽生え始めていた。

（そっか。将吾さんはただ奥手な人じゃなかったんだ……）

スキンシップを拒まずともそこまで望まない、そもその欲求が少ない男性だと勝手に分析していた。

しかし、それは誤りだったと今宵彼の行動で証明されてしまった。

本当は、乳首をいじめて射精するのが大好きな、変態だったのだ。嬉しい、こんなえつちな人だったなんて。あまりにも嬉しい誤算に、口元の緩みが抑えきれない。

正義感が強く誠実な強面の男性が、恋人に隠れて夜な夜なオナニーを楽しむ淫乱だった。冷めない興奮で、居ても立っても居られなくなる。

「……あっ」

ボタンッ。そうして気持ち先走りすぎた結果、大きな音を立ててドアが開け放たれた。

流石の音量に、将吾のきつく閉じられていた瞳がカッと開いた。結果として、自然と視線が絡むことになる。

「あ、え、……はっ？」

「こ、……くんばんは。将吾さん」

絶対誤魔化しようもないのに、とりあえず挨拶を返した。対する将吾は視線をさまよわせて、明らかに動揺を露わにしている。

楽しく自慰行為に耽っていたと思えば、部屋の外に恋人がいるのだから無理もない。気を昂らせている唯愛とは反対に、将吾の顔は青ざめていた。

唯愛は迷いのない足取りで、寝室へ一歩足を踏み入れる。逃げ場などない将吾は、もたれてゐる壁をチラリと見た後にその眼差しを自身の体へ移した。

「あつ、あ……違う。違うんだ、これは」

将吾はイヤホンを外すと、横に置かれていたタオルで下半身を隠し、ただ気まずそうに俯いた。唯愛はその様子を見下ろしながら、黙ってベッドに近づく。

先ほどからドクドクと心臓がうるさいのに、慌てる将吾とは対照的になんだか落ち着いている。

沈黙を貫いたままベッドの縁へ腰掛けて、動揺と困惑に飲まれた将吾の顔を覗き込んだ。

「何が違うの？」

優しく問いを投げる。高揚感がありながらも、やはりどこか冷静だった。けれども、将吾は少し怯えるようにして目線を外す。

怒っている、失望しているとでも思っているのだろう。そんなわけがないのに。

「そつ、そもそも。なぜ君が、」

「仕事が早く終わったから、顔が見たくなつて」

最初こそアポなしで自宅へ訪れることに後ろ向きな感情を持っていたが、そんな思いは既に消え去っている。

なぜなら、将吾の本当の姿を見られたことにひどく心を躍らせているからだ。

狼狽えている将吾の姿でさえ愛おしく、かわいく思えて仕方ない。冷静を装いながら、問いを重ねる。

「そういう将吾さんこそ、なにしてたの？」

果てる瞬間を見ていたにも関わらず、口角を上げて意地悪く言った。

バツの悪い表情を浮かべ答えあぐねている将吾の手から、すかさずタオルを奪い取る。隠していた下腹部は、絶頂の残滓で淫らに汚れている。

「あつ、返してくれ唯愛ちゃん、」

「ふふ、だあめ。私に隠れてなにしてたのか……、ちゃんと教えて？」

何度もお願いして、変えてもらった呼び方。ここまでか細く掠れた声音でそう呼ばれるのは初めてで、奥深くでグッと熱がこもる。

普段、首が痛くなるほど見上げている将吾のことが、今はとても小さく見えた。背中を丸めて萎縮している様は、少しかわいそうで可愛い。

きっと、隠し続けていたかったのだろう。それがこんな最悪の状況で暴かれてしまって、慌てるのも仕方ないことだ。

「ね、将吾さん？」

対して唯愛は、この状況をととても楽しんでいた。余裕の塊である将吾が狼狽し、焦っている姿に堪らなくなっている。

この場を掌握しているのが自分であるという確信から、ふっと笑みも漏れた。将吾の知らない一面を知ったことで、同時に新たな自分を発見している感覚もある。

可愛がりたい、意地悪したい。誰かにそう思うことなど一度もなかったのに、そんな欲求が今将吾に真っ直ぐ向けられている。

「……て、……た」

「ん？ なに？」

「ち、乳首触って、……射精、しました」

羞恥心を全開にした赤面顔で将吾は答えた。

普段はタメ口なのに、恥ずかしくて堪らないのか敬語なのもまた可愛らしい。

「そうだよね。乳首こねこね好きいって言いながら弄ってたもんね」

「あっ、いや、」

「その後も乳首触って、いぐいぐッ！　って射精してたのも見てたよ？」
唯愛がその目に焼き付けた淫らな将吾を思い出しながら続ける。

真正面から自身のオナニーを振り返るようなことを言われたのがよほど恥ずかしかったのか、顔を手で覆った。

「乳首いじるだけで射精できる変態さんだったなんて、知らなかったなあ」

わざとらしく詰めるような言葉の応酬に、将吾は隠しきれていない耳や首まで真っ赤にさせている。

そんな中、唯愛が気になったのは開かれた股座で頭をもたげている陰莖だった。

「あはっ。将吾さんてば、本当にえっちなんだ」

唯愛の言葉に顔から手を離れた将吾は、促されるまま視線を落とした。そして、分かりやすいほどにハッとした表情を浮かべる。

「おちんちん、また元気になってる」

「これはっ！ その……、生理現象、で」

太腿をさっと閉じて隠すが、巨根のせいか脚の隙間から様子は見てとれる。一度の射精では、到底満足できないのだろう。

また一步、将吾へ近づいていき、チラリと太腿に視線をやりながら言う。

「続き、してもいいよ？」

「は、……」

「そこ、まだ溜まってるんだよね。突然来た私が悪いもの」

邪魔はしない、と態度で示すように好意的な笑みを浮かべる。それがどれほど凶悪な提案であるか、唯愛はしっかりと理解していた。

将吾は反論することもなく、微かに開かれた唇を小さく震わせている。

「どうぞ？ 私はここで見てるね」

じいっと観察するように、将吾の裸体へ視線を向ける。肩がびくんと揺れて、喉仏が大きく上下した。

暫くの沈黙の後、観念したのか縮こまらせていた体を開いた。

「うつ……」

先ほどのように、両手を乳首へ持っていく。ピンと勃起上がった乳首は、既に期待で震えている。緩慢な動きで、将吾の指がそっと優しく乳頭へ触れた。

トントンと乳頭を胸筋へ押し込むように叩く。それは客観的に見て、じれったさを覚えるような愛撫に見えた。

そして息遣いも時折聞こえる程度で、喘ぎ声が露骨に少なくなっていた。明らかに歯を食いしばって抑え込んでいる。自慰とも言えない控えめな手つきと反応は、完全に唯愛の存在を意識していた。

「それで気持ちいいの？」

「っ、あ、……」

「声も小さいし。さっきはもっとアンアン喘いでたでしょ」

その姿は、本能のままに荒々しい呻き声をあげて、激しいほどの責めを繰り返していたとは思えなかった。

唯愛はすかさず指摘するが、恥じらってばかりで変化は見られない。

「千切れるくらい乳首こねこねして、いっぱい声出した方が気持ちいいん

じゃない？」

少なくとも、先ほどまで唯愛が見ていた将吾はそうしていた。乳首が取れてしまうんじゃないかと心配になるほど、つまみあげては捏ねくり回し、低い喘ぎ声をためらいなく漏らしていた。

スーツを大人っぽく着こなしている将吾からは全く想像できない下品な姿ではあったが、それも彼の一つの側面だろう。唯愛は、そんな将吾がもっと見たかった。

「あ、あう……、いや、でも、」

「私がつと知りたいんだ、将吾さんのこと。……だから、出来るよね？」

正直、自分のことながら、適応の早さにかなり驚いていた。

性欲を全く感じさせなかった恋人のオナニーという名の痴態を目の当た

りにして、失望するどころか受け入れて、あまつさえ興奮している。順応しすぎていて、もはや怖い。

けれどもそれは、将吾があまりにも蠱惑的で魅力的だったからだ。唯愛は、羞恥で火照っている将吾の顔を下から覗き見た。

彼は眉を下げて、グッと唇を噛み締めている。

「……………で、出来る」

長い沈黙を経て、押し勝ったのは唯愛の方だった。

将吾は唯愛の上目遣いに弱い、それは彼女も自覚があった。

「じゃあ。将吾さんの一番好きな触り方、教えてほしいな」

引っ張るのか、押し潰すのか、擦るのか。様々な触れ方で快感を得ていた将吾だったが、純粹に気になった。

恋人の好きなことは、どんな些細なことであっても知りたい。その熱量

に氣圧されるように、將吾はポソポソと喋り出す。

「ひ、引っ張って……、」

親指と中指で膨れ上がった乳首を摘んだ。將吾の指の太さを考えれば、かなり器用な芸当に見える。

すりすりっ♡と擦りながら摘まれた乳首は、指の隙間から微かに見える乳頭を尖らせて主張している。

「先っぽ、を……、その、」

將吾の人差し指が、所在なさげにふわふわ揺れている。張り詰めた突起は、そんな指を待ち焦がれているようにひくつく。

不安と羞恥でいっぱいな弱った声がなんともいじらしい。チラチラと將吾が視線を送ってくるが、唯愛は黙って微笑むだけで助け舟は出してやらない。

本当に嫌ならば追い出したらいいものを、そうしてこないのだから心から拒否している訳ではなさそうだ。圧倒的な体格差を武器に抵抗されれば、ひとたまりもないのは唯愛の方。

しかし、将吾は「お願い」を素直に聞き入れて行動している。その事実が、より一層彼女を高ぶらせた。

「こ、ここを、ツンツンって……おおッ♡」

綺麗に短く整えられている爪が、赤い尖りをちょんちょんと突いた。その瞬間、分かりやすく表情を崩して情けない声を上げる。

「へえ、先っぽツンツンするの好きなんだ」

「そ、そうッ。好き……っ♡ツンツンッて、して……、」

軽く叩くみたいに爪で突いたと思えば、次はぎゅっと押し込むように指を沈めた。